

トマス・アクィナス『聖書の勧めと区分』における「ソロモンの書」理解  
—伝統との一致と独自の前進—

Thomas Aquinas' Interpretation of the Organization of 'Tres Libri Salomonis'  
in 'De Commendatione et Partitione Sacrae Scripturae' :  
Traditional and Original

山口 隆介

Yamaguchi Ryusuke

要 旨

本研究ノートの目的は、トマス・アクィナスによる『聖書の勧めと区分』De Commendatione et Partitione Sacrae Scripturaeにおける「ソロモンの書」の構成についての議論を、古代以後トマスの時代までのキリスト教思想史の中に位置付け、その伝統とのつながりと独自性を正確に捉えることである。

研究の手順としては、まず上記著作における「ソロモンの書」の構成についてのトマスによる理解を概観する。次いで、トマス以前の時代における「ソロモンの書」の構成についての論述に繰り返し現れる表現形式を確認し、トマス以前の時代における「ソロモンの書」の構成についての伝統的解釈を仮定する。最後に、この伝統的解釈とトマスの理解を比較し、トマスが伝統的解釈を受け継ぎつつ、独自の前進をなしていること、そして、それらがどのような意味で伝統の継承であり、独自性の確立であるかを明らかにする。

研究の結果、トマスが「ソロモンの書」を、この世から浄化される過程に沿って構成されたものと見なしていること(①)が明らかになる。そして、この世から浄化されて神に向かうという図式それ自体はキリスト教外の異教の哲学にも見出しうるという意味での普遍性の主張(②)が、トマスの理解から引き出しうるということが示唆される。そしてそれらは伝統的解釈のうちにも潜在していると見ることができ、その意味でトマスの理解は伝統を継承したものであるが、①についてはそれを明言していること、②についてはより引き出しやすい形式で論じていることを独自性として評価される。

Key Word : 『聖書の勧めと区分』, トマス・アクィナス, 聖書解釈

## 0. はじめに

『聖書の勧めと区分』De Commendatione et Partitioe Sacrae Scripturaはトマス・アクィナスの著作の中では比較的新しく写本が発見された著作であり、公刊は20世紀初めになってからである。おそらくは存在したであろうパウロ書簡の区分を述べた箇所以外は残っており、トマスが聖書の全体像について論じた著作として小著ながら重要性を持つ（本段落は文献表に挙げた同書竹島幸一訳の訳者解説に全面的に依拠した）。

聖書全体の構成についてのトマスの所見が述べられているので、「箴言」「コヘレトの言葉」「雅歌」についても当然論じられている。トマスはこの3冊を伝承に従って「ソロモンの書」と呼んでいる（以下、この3巻を1組にして呼ぶ際は「ソロモンの書」と呼称する）。そして、この「ソロモンの書」の構成について述べられる箇所は、『聖書の勧めと区分』の他の箇所と、執筆者の見るところでは印象が異なる。

本研究ノートでも論じられるとおり、『聖書の勧めと区分』は、読者を神の下での生命に導こうとする目的のために聖書はどのようなことを語らなければならないかという視点でもっぱら論じられている。それゆえに、神の下での恵み、義、永遠の生命という目標に向けて、聖書の各文書の機能（戒めか助けか）や内容（実例による教導か言葉による教導かなど）が全体として体系をなすように論じられている。

しかし、上記「ソロモンの書」の構成について論じられている箇所は、後述するようにプロティノスに依拠しつつ、人間がその徳を、この世的な次元からこの世を超える次元へと浄化していく過程に言及している。すなわち、この箇所だけ人間がこの世の生で徳を身に着けた後、さらにこの世を超えていくという、人間の霊的成長の段階が直接語られているのである。しかもこの箇所は、『聖書の勧めと区分』において（残された写本には欠けているパウロ書簡に関する箇所については不明なので除くとして）唯一、異教の哲学者に依拠している箇所である。

したがって、この箇所は『聖書の勧めと区分』の中では他の箇所に比べて際立った特徴を有すると考えられる。そして、トマス以前のキリスト教思想家がなしている同じ主題に関する議論と比較すると、そこでもやはり際立った違いが見出された。

そこで、執筆者は本研究ノートの目的を、「ソロモンの書」の構成についてのトマスの議論を、古代以後トマスの時代までのキリスト教思想史の中に位置付け、トマスの議論がトマスの時代以前からの伝統とどのようにつながっているのか、そしてトマスの議論に独

自性を認めることができるならそれほどのような意味での独自性なのかを明らかにすることと定める。

トマスの聖書理解を研究するという場合、本来立てられるべき主題は、例えば、トマスの聖書理解のキリスト教思想史全体での位置づけ、すなわちそれがいかに伝統を継承し、いかに独自のものであるか、およびいかに後世に影響を与えたかについて全体的にとらえるということである。それが研究されてこそ、トマスの聖書理解の意味も真に正確に把握されるだろう。しかしながら、それが極めて遠大であり、かつ極めて困難な事業であるということは考えるまでもない。本研究ノートは、上の本来立てられるべき主題を準備する一試論に過ぎない。しかし、一試論としてこの本来の主題に貢献しうるなら、本研究ノートの目的は果たされるのである。

### 1. トマスによる「ソロモンの書」の構成についての解釈

本節での目的は『聖書の勧めと区分』における、「ソロモンの書」の構成についてのトマスの解釈を明らかにすることである。そのためにまず、『聖書の勧めと区分』で、聖書全体がどのような構成を持つものとして語られているかを概観する。『聖書の勧めと区分』はまず聖書のもたらすものを、恵み、義、永遠の生命としたうえで、その目的への関係から『聖書』を以下のように区分する。

まず、永遠の生命へと向かうことを助ける恵みとして「新約」があるのに対して、永遠の命へと向かわせる戒めとして「旧約」がある。そして、戒めは、君主による強制的な戒めと父が子を教諭するような訓戒的な戒めの2種類に区分される（君主による戒めはさらに君主その人による戒めと、君主の戒めを伝えその戒めを守るよう勧める伝令による戒めとに区分される）。

そして、父が子を教諭す訓戒に対応する聖典は、实例による訓戒と、言葉による訓戒、そして言葉と实例による訓戒とに分けられる。そして、「コヘレトの言葉」は言葉による訓戒に属するものと位置付けられている。

永遠の生命に向かわせる訓戒には、知恵の奨めと知恵の戒めがあるとトマスは区分し、知恵の奨めが「知恵の書」、そして「知恵の戒め」にあたるのが、「箴言」「コヘレトの言葉」「雅歌」である。そして、トマスは「ソロモンの書」の3巻の関係に、プロティノス Plotinus の『エネアデス』 Enneades にある徳の段階を援用する。

プロティノスは、徳に、市民的徳 *virtutes politicae*、浄化的徳 *virtutes purgatoriae*、浄化された精神の徳 *virtutes purgati animi*、範型的徳 *virtutes exemplares* の4段階をおく。市民的徳はこの世の市民として善き生き方をしている段階であり、善ではあるがこの世的なものである。浄化的徳はこの世から浄化されていく段階であり、そして、浄化された精神の徳が文字通り浄化の完成段階である。すなわち、この3つは、この世→この世からの浄化→浄化の完成という過程を成している。なお、最後の段階である範型的徳は神のうちにものみある徳の原型である。

トマスは上述の段階のうち、市民的徳を「箴言」に、浄化的徳を「コヘレトの言葉」に、浄化された精神の徳を「雅歌」に当てはめる。すなわち、この世的な段階での訓戒あるいは知恵の戒めが「箴言」、この世から浄化される段階の知恵の戒めが「コヘレトの言葉」、そしてこの世からの浄化が完成した段階を言葉で示す知恵の戒めが「雅歌」であるという位置づけになる。

善悪いずれにも固定されていない人間が、善あるいは悪という価値へとより強く関係づけられている状態が *se habere* としての *habitus* であり、善へとより強く結びついているということが善き *habitus*、すなわち徳である。「ソロモンの書」はこの徳の浄化の過程を教え諭す訓戒の書である。それは人間の善へと向かうありようの浄化（この世的段階から神的段階へ）と解することができるだろう。そして、「コヘレトの言葉」は、ヒエロニムス Hieronymus の『「コヘレトの言葉」註解』序文を参照し「世をさげすむこと」 *contemptus mundi* に向けられた書物であることが明言されている。つまり、トマスの「旧約」観においては「コヘレトの言葉」は人間のありようがこの世からの浄化される段階を説く訓戒の書であるが、この世からの浄化はプロティノスに倣った哲学的表現であって、同じ段階を、トマスは、キリスト教の伝統的表現では「世をさげすむ」ことと表現していると読み取ることができる。

（そして、「コヘレトの言葉」の基本テーマは、その1章2節にあるように、すべてが空 *omnia vanitas* ということである。したがって、少し飛躍がある解釈になるかもしれないが次のような予測を立てることができよう。すなわち、「コヘレトの言葉」が訓戒しているのは、世を空としてさげすむことである。そして、この訓戒はトマスによれば知恵の奨めとも位置付けられている。その知恵の内実は、世のすべてが空だという認識である。）

## 2. 「ソロモンの書」の構成に関するトマス以前の伝統

「コヘレトの言葉」の位置づけ（ひいては「ソロモンの書」の構成および読み方）についてトマス以前はどのように論じられてきたかを見ておきたい。ミーニュ Migne の『ラテン教父著作集』には、索引によれば以下の著作が「コヘレトの言葉」の註解に位置付けられる著作として収録されている（PL219, 107. 各著者没年は『岩波西洋人名辞典』1981年増補版を参照。前掲書にないものはPL218, 133-174所収の Index Alphabeticus Auctorum を参照）。

・ヒエロニムス（419 or 420 没）『「コヘレトの言葉」註解』 Hieronymus, Commentarius in Ecclesiasten,

・サロニウス（453 没）『神秘的講解』 Salonius Viennensis Episcopus, Expositio Mystica 中の「コヘレトの言葉」についての部

・アルクィヌス（804 没）『「コヘレトの言葉」註解』 Alcuinus, Commentarius super Ecclesiasten

・ウアラフリドゥス（849 没）『行間註解』 Walafridus, Glossa Ordinaria の当該箇所

・ペトルス・ダミアニ（1072 没）の『集成』 Collecta ex Petro Damiano 中の Testamonia de Ecclesiaste

・ルペルトゥス（1135 没）『「コヘレトの言葉」註解』 Rupertus Abbas Tuitiensis, Commentarius in Librum Ecclesiastes

・ヒルデヴェルトゥス・チェノマネンシス（1135 没）『「コヘレトの言葉」に寄せる詩歌』 Hildebertus Cenomanensis, Carmen in Ecclesiasten

・ホノリウス・アウグストドゥネンシス（1136 没）『「ソロモンの書」中の2冊「箴言」および「コヘレトの言葉」についての問答』 Honorius Augustodunensis, Quaestiones et ad Easdem Responsiones in Duos Salomonis Libros Proverbia et Ecclesiasten

・サン・ヴィクトルのフーゴー（1141 没）『「コヘレトの言葉」に関する説教』

上記の著作中最も古い時代に属するヒエロニムスの註解およびサロニウスの註解では、「ソロモンの書」の構成および「コヘレトの言葉」の位置づけに関しては以下のように論じられている（以下のテキストの引用では、語句そのものあるいは意味内容を共通する表現が見られる。本研究ノートの議論の上でも重要であるため、共通する表現を太字で示し

ている)。

S. Eusebii Hieronymi, Commentarius in Ecclesiasten(PL23, 1063 - 1064)

Is itaque **juxta numerum vocabulorum tria volumina edidit**, Proverbia, Ecclesiasten, et Cantica canticorum: in Proverbiis **parvulum docens**, et quasi de **officiis per sententias erudiens**. Unde, et ad **filium** ei sermo crebro repetitur. In Ecclesiaste vero **maturae virum aetatis instituens, nequidquam in mundi rebus putet esse perpetuum, sed caduca, et brevia universa quae cernimus. Ad extremum jam consummatum virum, et calcato saeculo**<sup>1</sup>, praeparatum, in Cantico canticorum **sponsi jungit amplexibus**. Nisi enim prius reliquerimus vitia, et pompis saeculi renuntiantes, expeditos nos ad adventum Christi paraverimus, non possumus dicere: *Osculetur me ab osculo oris sui*(Cant. I,1).

Salonius Viennensis Episcopus, In Ecclesiasten Expositio Mystica(PL53, 993)

VERANUS. Quot libros edidit Salomon?

SALONIUS. **Tres tantum juxta numerum vocabulorum** suorum: Proverbia, Ecclesiasten et Cantica canticorum.

VERANUS. Quid ait Salomon in Proverbiis, aut quid docet in Ecclesiaste, vel Cantico Canticorum?

SALONIUS. In Proverbiis **docet parvulum**, et **per varias sententias, instruit quasi filium**. In Ecclesiaste vero jam **perfectae aetatis virum imbuat**, ut intelligat quia **in hujus mundi rebus nihil est perpetuum**, nihil gloriosum aut magnum; sed **omnia sunt brevia, caduca et vana, quae cernimus**. In Cantico Canticorum **jam consummatum virum** atque perfectum in omnibus, et variis exornatum virtutibus, **sponsi**, id est, Domini nostri Jesu Christi **amplexibus jungit**.

上に引用した2つのテキストを比較する限り、内容だけでなく語彙あるいは語句の意味内容に共通するものがかなりの程度見出される。そして、これらの語彙あるいは表現形式はアルクィナス以降にも受け継がれていく。

Alcuinus, Commentaria super Ecclesiasten (PL100, 668-669)

Is itaque **juxta numerum vocabulorum** suorum, **tria volumina edidit**: Proverbia, Ecclesiasten, Cantica Canticorum. In Proverbiis **parvulum docens**, et quasi de **officiis** praesentibus **erudiens**, unde ad **filium** crebro sermo repetitur. In Ecclesiaste vero, **maturae virum aetatis instituens, ne quidquam in mundi rebus putet esse perpetuum**, sed **caduca et brevia universa quae cernimus. Ad extremum jam consummatum virum, et calcato saeculo** praeparatum, in Cantico canticorum, **sponsi jungit** amplexibus. Nisi enim prius relinquamus vitia, et pompis saeculi renuntiantes expeditos nos ad adventum Christi pareparaverimus, non possumus dicere: Osculetur me osculo oris sui (Cant. I, 1).

ちなみにウアラフリドゥスの『行間註解』の場合、「ソロモンの書」の構成についての論述が見出される「雅歌」の註解である。ここにも語彙、表現形式の継受が見出される。

Walafridus Strabus Glossa Ordinaria Libri Canticum Canticorum(PL113, 1125-1127)

Salomon filius David regis Israel **juxta numerum vocabulorum** suorum **tria volumina edidit**. .....Secundum librum קהלת *coheleth* vocavit, qui Graece εκκλησιαστης vocatur, Latine concionator: eo quod conciones non solum spiritualiter ad unum, sicut in Proverbiis, sed universos generaliter dirigantur, **docent, omnia quae in mundo cernimus**, vana esse et **brevia**: et ob hoc minime appetenda. Tertium librum שיר השירים *sir hassirim* praenotavit: qui in Latinam linguam vertitur in Cantica canticorum. ....Ecclesiastes rerum naturas discutiens, **cuncta in mundo vana et caduca** esse deprehendit, rerumque omnium fragilitate conspecta, renuntiari mundo admonuit. ....Ecclesiastes, id est concionator, et significat illum, qui rationabiliter erat allocuturus, et congregaturus Ecclesiam. **Juxta numerum vocabulorum, tres** fecit libros: Proverbia, in quo libro **docet parvulos** non tam aetate quam sapientia, de aequanimi conversatione in mundo, scilicet qualiter licite possint uti temporalibus; Ecclesiasten, in quo **instruit** homines **provectionis aetatis** ad contemptum **caducorum**; Cantica canticorum, scilicet hoc opus, in quo **virum consummatum** docet de solo amore Dei, ut requiescat inter brachia sponsi. ...

いっぽう、時間的制約のため十分に精査しきれたとは言えないがペトルス・ダミアニ前掲書、ルペルトゥス前掲書、ヒルデヴェルトゥス・チェノマネンシス前掲書には、これまで述べてきた表現形式の継受を見出すことができなかつた。そもそも、「ソロモンの書」の構成に関する論述を見出すことができなかつた。しかしながら、ホノリウス・アウグストドゥネンシスおよびサン・ヴィクトルのフーゴーには再び表現形式の継受を見出すことができる。

Honorius Augustdunensis, *Quaestiones et ad Easdem Responsiones in Duos Salomonis Libros Proverbia et Ecclesiasten* (PL172, 311-312)

Quot libros edidit Salomon? Tres tantum, **juxta numerum vocabulorum** suorum, hoc est Proverbia, Ecclesiasten, Cantica canticorum.

Quid ait Salomon in Proverbiis? aut quid docet in Ecclesiaste, vel in Cantico canticorum? In Proverbiis **docet parvulum**, et **per varias sententias instruit**, quasi **filium**. In Ecclesiaste vero jam **perfectae aetatis virum** imbuit, ut intelligat **quia in hujus mundi rebus nihil sit perpetuum**, nihil gloriosum aut magnum, sed **omnia brevia, et caduca** et vana sint **quae cernimus**. In Cantico canticorum, **jam virum consummatum**, atque in omnibus et variis exornatum virtutibus sponsi Domini nostri Jesu **jungi amplexibus**.

Hugo de S. Victore, *In Salomonis Ecclesiasten Homiliae XIX* (PL175, 115-116)

.....Itaque **secundum tria vocabula tria composuit volumina**. Primum cui titulus Parabolae, sive Proverbia Salomonis. Secundum, quod nunc in manibus habemus, quod Ecclesiastes dicitur. Tertium, quod Canticum canticorum appellatur. In primo quasi ex paterno affectu dilectum **filium alloquitur**, eumque crebra admonitione ad vitia declinanda, et ad consecandas virtutes exhortatur. In secundo provecum, et maturae aetatis virum admonet, **ne quidquam in mundi rebus putet esse perpetuum**. Ad **extremum** vero **jam consummatum, et calcato saeculo expeditum** in Canticis canticorum **sponsi jungit amplexibus**.

(太字での強調は上の引用まで)

したがって、「ソロモンの書」の構成に関する論述は、ヒエロニムス、サロニウス時代の表現形式が継受されていると言うことができる（そして没年から単純に考えれば、おそらくはヒエロニムスの表現が先行するのではないかと推測されるが、この点に関しては今後の調査が必要である）。ただし、時代が下ると、継受された表現はテキストの中にひとまとまりにはされず拡散していき、それらの間により深められた議論が入ってくる。しかしながら、それは裏を返せば、そのように著者各々が独自の思索の深化を行っているその中で継受された表現が要所要所で反復され、表現と共に「ソロモンの書」の構成理解の枠組みを受け継いでいると言った方がいいのかもしれない。

とまれ、これまで述べてきたことから、継受を確認された表現形式による「ソロモンの書」の構成に関する論述を、「ソロモンの書」の構成についてのトマス以前の伝統的解釈とすることにする。

この伝統的解釈は、主にヒエロニムスの表現に従い、次のような形にまとめることができよう。ソロモンは、「幼い子どもにもろもろの務めについて *de officiis* 言葉によって指導するように *quasi* して教える」ために「箴言」を著し、「我々が認識することができるものはすべて儂く *brevia et caduca*、この世では何一つ永続しないことを成熟した年代の者に教える」ために「コヘレトの言葉」を著し、「すでに衰え晩年と言える年代の者 *extremum jam consummatum virum* に準備をさせ、花婿 *sponsus* たるキリストに結びつける」ために「雅歌」を著した、と。

まず確かなことは、伝統的解釈では、想定される読者の年代という形で「ソロモンの書」が3つの段階に対応しているということ、そしてその段階はキリストすなわち神に向かって進む段階だということである。そして、この年代は、実年齢だけでなく精神的な意味での年代すなわち精神の成熟度であるということは、ウァラフリドゥスのテキストで言明されている (...*Proverbia, in quo libro docet parvulos non tam aetate quam sapientia...* PL113, 1127)。

ここで問題になるのは、ウァラフリドゥス以前、特に伝統的解釈の始まった時点でどうであったかである。この問題についてヒントとなりえるのが、ヒエロニムスが、「ソロモンの書」の3段階に「箴言」に倫理学 *ethica*、「コヘレトの言葉」に自然学 *physica*、「雅歌」に論理学 *logica* というように割り当てているという事実である (*Haud procul ab hoc*

ordine doctrinarum et philosophi sectatores suos erudiunt: ut primum ethicam doceant, deinde physicam interpretentur; et quem in his profecisse perspexerint, ad logicam usque perducant. PL23, 1064)。すなわち、人間の住む変化に富んだ世界の中でどのように実際の行動をとるが「箴言」、人間の住む物質世界が変化し、永続するものがないことの法則的な認識が「コヘレトの言葉」、物質世界に左右されない純粋な知が「雅歌」である。これは知の普遍性の3段階とも、精神がこの世界から脱却している純度の3段階とも呼ぶことができよう。すなわち、ウァラフリドゥスの段階で明言されているものと同じ発想が、ヒエロニムスにも見出すことができると言えるのである。

ちなみに、この「ソロモンの書」への学問の割り当てはサロニウスには見出されないが、アルクィヌス、ウァラフリドゥス、サン・ヴィクトルのフーゴーには見出されるので、伝統的解釈において影響力を残した本源と言えるのはヒエロニムスであると言えよう。と同時に、「箴言」「コヘレトの言葉」には割り当てのぶれはないが、「雅歌」への割り当ては、上述の通りヒエロニムスは論理学であるが、アルクィヌスは神学 *theologica*、ウァラフリドゥスは思弁すなわち観想 *theorica, id est contemplativa*、サン・ヴィクトルのフーゴーはアルクィヌスと同じく神学 *theologia* というようにぶれがあるということも付言しておく。

また、トマスの解釈と比較するなら、ヒエロニムスの務めがこの世の務めと明言されていないことと、「務めについて」という句が登場する箇所が *quasi* 「ように」に係る節であるのが、なおも気になるころではある。この務めがこの世の務めであることが明言されるのは、やはりウァラフリドゥスの時点である (...*Proverbia, in quo libro docet parvulos non tam aetate quam sapientia, de aequanimi conversatione in mundo, scilicet qualiter licite possint uti temporalibus...* PL113, 1127)。ウァラフリドゥスの言及には *quasi* という語は登場しない。その意味で、伝統的解釈はウァラフリドゥスの時点で、「箴言」がこの世的な務めを教える段階の書であるということを明示していると言える。何より「箴言」そのものの内容が、この世的な務めを神の下に生きることを教える内容である。また、ヒエロニムスが「箴言」に倫理学を割り当てているということは、「箴言」の内容を、神への直接的な務めというよりは、やはり人の間の倫理（それが神の下でのことであれ）であると捉えていたことを示すと考えることは可能である。

### 3. 伝統に対するトマスの独自性

かくして「ソロモンの書」の構成に関する伝統的解釈の概要をとらえることができた。それは少なくともウアラフリドゥスの『行間註解』の時点では確実に、そしておそらくは伝統の始まりの時点から、トマスの解釈と同様に、「ソロモンの書」は、この世からの脱却度合いあるいは解放度合いに応じた3段階の構成になっていると考えられてきた。その意味でトマスの解釈は伝統と完全に合致したものである。しかし、同時に、トマスに先行する先人たちはいずれも、プロティノスという異教の哲学者を参照して自己の表現の典拠することもなければ、この世からの浄化の度合いに応じて「ソロモンの書」が序列化されると明言することもなかった。

伝統的解釈においてもこの世からの浄化の度合いに応じた序列化すなわち段階付けが現れているということは、本研究ノートにおける実際の作業においても、トマスにおける「ソロモンの書」の構成に関する解釈を理解した上で、「ソロモンの書」の構成に関する伝統的解釈を点検し、明言はされていないが発想の根幹は同じであると言えるものを見出すことで確かめたものである。

トマス自身が自分の解釈に関し、伝統的解釈に対する独自性を主張したかどうかはさておいて、今、本研究ノートにおいてトマスの解釈に伝統的解釈に対する独自性を見出すなら一つの可能性は、「ソロモンの書」の構成について、伝統的解釈の中では明言されていなかった基本構造、すなわち「ソロモンの書」がこの世からの浄化の過程にしたがって構成されているということを明白に言葉として表現したということである。そして、ここではもう一つの可能性を検討しておきたい。それは「ソロモンの書」の構成をトマスが異教の哲学者の語彙を用いて表現しているということが、トマスの独自性である可能性である。

確かに、「ソロモンの書」の構成についてトマス以前のテキストでは、プロティノスのような異教の哲学者が参照されるということにはなかった。その意味で、これはトマスの解釈の特徴と言ってよい。ここで問題となるのは、その意味するところである。そこで、その意味するところは、異教の哲学と聖書の示す思想の一致の主張が可能になったことであると仮定し、この主張が、トマス以前のテキストからも主張可能か否かを検討する。この主張とはすなわち、聖書の語らんとすることがキリスト教の内外ともに通用する普遍的なものだという主張でもある。

結論から言うと、キリスト教の内外ともに通用する普遍性の主張もまた、「ソロモンの書」

の基本構造と同じく、伝統的解釈の中にも潜在している可能性は十分にある。すでに述べた通りヒエロニムスは倫理学、自然学、論理学を「ソロモンの書」に割り当てているが、これらの学問はキリスト教内に限定されたものでない。また、ヒエロニムス以後の伝統的解釈では「雅歌」に対応する学問が、神学、観想というキリスト教内（あるいはユダヤ教に始まる唯一神教内）の知あるいは認識の性格が強いものになっていくという流れがあるようにも見ることができる。しかしながら、観想はまさに、トマスが参照しているプロティノスをその代表とする新プラトン主義哲学においても重視される知の形態である。また神学も、プロクロス著作の名に『神学綱要』や『プラトン神学』があるように、新プラトン主義とは縁が深い語である。

以上のように、「ソロモンの書」の語らんとするものにキリスト教の内外ともに通用する普遍性のあるという主張は、伝統的解釈の中からも引き出すことができる。したがって、トマスがプロティノスを参照して「ソロモンの書」の構成を説明したことの意味は、伝統的解釈の中からも主張可能であったものを、明言で以てより明白に主張可能にしたということである。このことは無論、この世からの浄化の過程として「ソロモンの書」の構成を説明するというトマスの試みの、意図せざる副産物に過ぎぬ可能性もある。しかしながら、キリスト教思想家を援用するのではなく、あえて異教の哲学者を用いているということはトマス自身の選択であり、そのことによる効果であるということも事実である。

以上本節の議論をまとめると、トマスが自覚的に意図したかどうかはさておき、トマスが異教の哲学者であるプロティノスを援用することによって、トマス以前の解釈の伝統、特にその中で継受されてきた表現からは、引き出すことが可能であっても明言はされていなかった「ソロモンの書」の構成の基本構造が明瞭となり、かつまた、これも引き出すことが可能であっても比較的遠回しだったキリスト教内外に通じる聖書の普遍性の主張が、引き出すことがより容易になったと言うことができよう。

#### 4. まとめと限界、および今後の展望

以上で本研究ノートの本論は完了した。本論の内容をまとめると、まず『聖書の勧めと区分』のテキストから、トマスの「ソロモンの書」観は、「ソロモンの書」はこの世からの浄化のプロセスに沿って構成されているというものであることが示された。そして、トマス以前になされてきた「ソロモンの書」の構成に関する説明は、それぞれの著者ごとの思

索の深化はありつつも、最も時代的に先立つヒエロニムスおよびサロニウスの表現を継受することで基本的な枠組みをいわば伝統として受け継いできたことと示唆を得た。

その示唆に従って伝統的解釈を想定し、その内容を継受された表現から探ることで、トマス以前の時代の伝統的解釈は「ソロモンの書」が「キリストすなわち神に向かって進む段階」に対応して構成されているとするものであると見定めた。そして、この伝統的解釈には、「ソロモンの書」はこの世からの浄化の過程に沿って構成されているというトマスの理解が潜在していると言えることを確かめた。ゆえに、『聖書の勧めと区分』におけるトマスの「ソロモンの書」観は、確かに「ソロモンの書」がこの世からの浄化の過程に沿って構成されていることを明示したという点において独自性を有するが、それは伝統と対立することを主張しているという意味での独自性ではなく、伝統の潜在しているものを明示し、前進したという意味での独自性である。

そして、そこから派生して、もう一つの独自性、あるいは前進が導き出される。それは異教の哲学者が援用されることで、トマス以前の説明から引き出そうとすると比較的遠回しになった「聖書の語る真理はキリスト教の外にも通用する普遍性を持つ」という主張がより容易に引き出せるようになったということである。

前節の議論の終わり近くでトマスの意図にわずかながら触れたが、それは、テキストに明言されていないことである以上、推測の域を出ない。しかしながら、本論では議論しなかったがここで、『聖書の勧めと区分』が、異説はあるものの、トマスが1252年に聖書学講師に就任した折の就任講演とされているということにも注目しておきたい。その主著『神学大全』で神学の教授法が系統だっていないことを非難し、合理的な学習順序にしたがった構成の教科書が編まれるべきであると主張したような人物が、「ソロモンの書」の構成を語るところでわざわざ異教の哲学者を援用しているのであり、しかも、この『聖書の勧めと区分』で、異教の哲学者が援用されているのはこの箇所だけである。これは、この援用が自覚的であったと解釈することを、十分可能にする材料ではなかろうか。

本研究ノートでは、ヒエロニムスとサロニウスとの影響関係について、没年の単純比較による推測以上の言及ができなかった。この点は調査を継続する必要がある。

また、本来ならトマスと同時代の思想家が、「ソロモンの書」をどう捉えているかをも調べるべきなのだが、時間的制約のため果たせなかった。トマスの生きていた時代では、「ソロモンの書」の構成についてプロティノスを援用するのがむしろスタンダードであった可

可能性を、本研究ノートでは検討することができなかった。もし、そうするのがスタンダードであったなら、本研究ノートでその可能性を主張した、伝統的解釈に対するトマスの独自性は、トマスが属する盛期スコラの時代が、それ以前の時代に対して有する独自性ということになる。その点の検討は今後の課題としたい。

また、執筆者が、トマスの『聖書の勧めと区分』の当該箇所注目したそもそものきっかけは「コヘレトの言葉」のキーワードである *vanitas* についてトマスがどのように解釈しているかに関心があったからである。繰り返しになるが、トマスの聖書解釈は研究が遅れている分野であるが、『神学大全』全体が「福音的な土壌に植えられている」<sup>2</sup>との言及もあるように、聖書的な言語抜きにはトマスの神学だけではなくトマスの哲学も真の意味で理解はできないと思われる。本研究ノートにて、トマス思想と先行思想を比較する方法を見出し、伝統的解釈との関連でトマスの理解をより深く捉えることができた上は、本来の目的である *vanitas* あるいは *vanum* を含む聖書的な語彙についてのトマスの解釈に研究を進めていきたい。これが、今後の展望である。

#### 文献表

Thomas Aquinas, *De Commendatione et Paratione Sacrae Scripturae*, in: *Opuscula Theologica*, vol.1, Marietti, 1954, pp.435-439

トマス・アクィナス『聖書の勧めとその区分』竹島幸一訳、『中世思想原典集成 14 トマス・アクィナス』(平凡社, 1993年) pp.33-47 所収(訳者解説 pp.28-32, 訳注 pp.48-52)

Thomas Aquinas, *Summa Theologiae I*, q.1-q.49, in: *Sancti Thomae Aquinatis Doctoris Angelici Opera Omnia Iussu Impensaque Leonis XIII P. M. Edita*, tom.4, Roma, 1889

*Midrash Rabbah Ecclesiastes*, translated by Rev. Dr. A. Cohen, M.A., Ph.D., London: New York, 1983

プロティノス「徳について」田中美知太郎・水地宗明・田之頭安彦訳, 田中美知太郎責任編集『プロティノス ポルピュリオス プロクロス』(中央公論社, 1995年) pp.221-235 所収。

S. Eusebii Hieronymi, *Commentarius in Ecclesiasten*(PL23, 1063-1174)

Salonius Viennensis Episcopus, *In Ecclesiasten Expositio Mystica*(PL53, 993-1012)

Alcuinus, *Commentaria super Ecclesiasten* (PL100, 665-722)

Walafridus Strabus Glossa Ordinaria Libri Ecclesiastes(PL113, 1115-1126)

Walafridus Strabus Glossa Ordinaria Libri Canticum Canticorum(PL113, 1125-1168)

S. Petrus Damianus, Testamonia de Ecclesiaste, in: Collectanea in Vetus Testamentum (PL145, 1139-1142)

Rupertus Abbas Tuitiensis, Commentarius in Librum Ecclesiastes(PL168, 1197-1306)

Ven, Hildebertus Cenomanensis, In Primum Caput Ecclesiastes (PL171, 1271-1276)

Honorius Augustudunensis, Quaestiones et ad Easdem Responsiones in Duos Salomonis Libros Proverbia et Ecclesiasten (PL172, 311-348)

Hugo de S. Victore, In Salomonis Ecclesiasten Homiliae XIX (PL175, 113-256)

デイヴィッド・S・サイツマ (2020) 「トマス・アクィナスと改革派の聖書解釈：ウィリアム・ホウィツィッカーの貢献」青木義紀訳, 東京基督教大学紀要『キリストと世界』(30), pp.1-29

註

<sup>1</sup> 本論では表現形式の継受を論じていくが, そこで確認される継受された表現形式のうち, 『聖書の勧めと区分』における「ソロモンの書」の構成についての論述に受け継がれた語句はこの箇所表現 (*calcato saeculo*) のみであり, *saeculi curis penitus calcatis* (世への気遣いなど遠くにうっちゃって) というように, *curis* という語を補い, より文意を読み取りやすく書き換えている。このことはトマスが, 「ソロモンの書」の構成の解釈に際し, 伝統的解釈を踏まえた上で, その内容を明瞭にする営みとして論述を行っていた面があることを示唆する。Cf., Thomas Aquinas, *De Commendatione et Paratitione Sacrae Scripturae*, in: *Opuscula Theologica*, vol.1, Marietti, 1954, p.438r: ‘.....vel sapientiae praecepta proponuntur, et hoc in tribus libris Salomonis: qui quidem ditinguuntur secundum tres gradus virtutum quos Plotinus [Ennead. I, 1. II, cap.2-7] distinguit: quia praecepta sapientiae non nisi de actibus virtutum esse debent. In primo gradu, secundum eum, sunt virtutes politicae, quibus homo moderate rebus mundi utitur et inter homines conversatur: et secundum hoc est liber Proverbiorum. In secundo gradu sunt virtutes purgatoriae, quibus homo se a rebus mundi exuit per contemptum; et secundum hoc est Ecclesiastes qui ad contemptum mundi ordinatur, ut patet per

Hieronymum in Prologo [Praef., PL 23, 1061]. In tertio gradu sunt virtutes purgati animi, quibus homo, **saeculi** curis penitus **calcatis**, in sola sapientiae contemplatione delectatur; et quantum ad hoc sunt Cantica. In quarto autem gradu sunt virtutes exemplares in Deo existentes, de quibus praecepta sapientiae non dantur, sed magis derivantur ab eis.’ (本文に倣い、伝統的解釈において継受されてきた表現と合致する箇所を執筆者による太字で強調した。トマスが典拠として掲げた文献を読者が参照する上での便益を図り、上記マリエッチ版で補われている文献情報は削除しなかった。)

<sup>2</sup> デイヴィッド・S・サイツマ (2020), p.2 参照。ただし、当該箇所は、マリー=ドミニク・シュニュの「記憶に残る言葉」として出典をあげずに引用されたものである。